（ 様式D－２ ）
（ 別　　紙 ）

令和６年度　海外派遣研究員研究報告書

令和７年５月20日

日本大学理事長　　殿
日 本 大 学 学 長　　殿

所　　属　　経済学部
資格・氏名　　准教授・杉　藤　久　志

■本報告書の内容を公表することは，了承しております。
□本報告書の内容を公表することは，差し控えください。
※いずれかにチェックし(■)提出すること

令和６年度海外派遣研究員（長期）の研究実績を，下記のとおり報告いたします。

記

１　区　　分　　長期
２　研 究 課 題

中世ドリーム・ヴィジョンにおけるアレゴリーと存在論の融合に関する研究

３　派 遣 期 間　　西暦　２０２４年４月１日　～　２０２５年３月２８日
４　派　遣　先　　英国およびフランス
５　研 究 目 的

本研究の目的は、中世ヨーロッパ文学において、人間の感情を寓意的に表す宮廷文学の技法(C.S. Lewis が“allegory of love”と呼んだもの)と、宇宙の仕組みや成立過程を探究しようとする哲学的伝統がなぜ融合する必要があったのか、そして、なぜドリーム・ヴィジョンという文学ジャンルにおいてその融合が生じたのかを理解しようとすることであった。従来のドリーム・ヴィジョンの研究は、例えばC.S.Lewis の *Allegory of Love*(1936)、A.C.Spearing の *Medieval Dream-Poetry*(1976)、Stephen Kruger の *Dreaming in the Middle Ages*(1992)など、ドリーム・ヴィジョンのジャンル的発展を時系列に辿っていくものが多く、なぜドリーム・ヴィジョンが文学ジャンルとして必然のものだったのかを吟味している研究が少ない。また、ドリーム・ヴィジョンは、融合した二つの要素のうち、哲学的伝統のほうに焦点を当てられることも多い。Kathryn Lynch の *The High Medieval Dream Vision* (1988)や、近年でもMarco Nievergelt の *Medieval Allegory as Epistemology* (2023)などはその例である。本研究では、なぜ哲学の思想は宮廷における感情表現を文学的要素として求めたのかを考えることで、ドリーム・ヴィジョンというジャンルの本質を捉えようとした。

以上の目的のために、中世英文学のみならずヨーロッパ文学や歴史的背景の幅広い資料を閲覧できるオクスフォードのボドリアン図書館で研究することは、この計

画に不可欠であった。また、ボドリアンはドリーム・ヴィジョン（あるいはその関連分野）の重要な作品である Alain de Lille の *De planctu naturae* や『薔薇物語』、マクロビウス、チョーサー、ガワー、ラングランドなどの写本を多く所有している。これらの実際の写本を閲覧し、研究資料とすることも、オクスフォードを選んだ理由であった。さらに、オクスフォード英文科の Marion Turner 教授から、研究全般について助言を受ける計画もあった。

そして本研究はヨーロッパ大陸の中世文学を参照するため、パリにあるフランス国立図書館を訪問し、所蔵されている写本（今回は、ボエティウスの *Consolatio Philosophiae*）を閲覧することも計画の一部とした。

6　研 究 概 要

①研究の方法

主に、1.「感情の歴史」、2.「抒情詩の伝統」の２つの視点から、ドリーム・ヴィジョンの性質を探る研究を行った。また、オクスフォードのボドリアン図書館とフランス国立図書館が所蔵する写本を参照することで、当時の人々が夢について持っていたイメージを理解しようとする 3.「写本の研究」も行なった。

②渡航先での活動内容

1. 「感情史」からの分析

15 世紀の匿名詩人による中英語ドリーム・ヴィジョン作品 The *Isle of Ladies* の論文執筆を行なった。すでに執筆していた論文に対し、感情の歴史を考慮に入れた上で議論を補強し、現在の学問的動向にも貢献するような内容のものを目指した。この匿名詩人はナレーターとして自分が見た夢を語るが、その夢の内容を実際に起こったことであるかのように強く感じる傾向がある。この特徴を語る際、近年活発になっている感情の歴史についての研究を参照することで、現在の批評におけるこの詩の位置付けをより具体的に説明できるよう意識した。ボドリアン図書館にある無数の関連資料、特に Glenn Burger and Holly Crocker, eds., *Medieval Affect, Feeling, and Emotion* (2019), Sarah McNamer, *Affective Meditation and the Invention of Medieval Compassion* (2010), Fiona Somerset, *Feeling Like Saints: Lollard Writings after Wyclif* (2014)などを分析し、これらの批評との接点を見出す作業を行なった。この論文については、ロンドン大学名誉教授 Julia Boffey 氏、オクスフォード大学セント・ジョンズ・カレッジ名誉教授 Carolyne Larrington 氏らによるフィードバックをいただいた。

2. 「抒情詩の伝統」の調査

「研究目的」において、哲学的伝統がなぜ抒情詩の感情表現と結びついたか、という疑問を提起した。その原因を探るために、特に宮廷文化における抒情詩の発展とその特徴を幅広く調査し、ドリーム・ヴィジョンの成立過程をより大きな視点から理解することを目指した。具体的にはトゥルバドール詩人 Marcabru や Bernart de

Ventadorn らの作品、そして Sarah Kay の *Subjectivity in Troubadour Poetry*(1990) などの研究を参照した。さらに、ドリーム・ヴィジョンの文学史において哲学的な視座を提供している作品群についても、Martianus Capella の *De nuptiis Philologiae et Mercurii*、Bernardus Silvestris の *Cosmographia* などを読むことで、これらの新プラトン主義的思想が人間の心・感情の分野とどのような関係を持ちうるか可能性を探った。こうした広い話題を整理するための助言を、レディ・マーガレット・ホールの Marion Turner 教授、セント・ヒューズ・カレッジの Nicholas Perkins 教授、さらに英文科のセミナー参加を通して交流ができたハーバード大学の Nicholas Watson 教授からいただいた。また、フランス文学科主催によるテュレーン大学 Jonathan Morton 准教授の講演に参加し、その後に研究計画の構成について話し合った。

3. 写本の調査

ボドリアン図書館およびフランス国立図書館の写本のうち、当時の人々がドリーム・ヴィジョン作品に対して持っていたイメージの手がかりになるものを閲覧した。代表的な例を挙げると、ボドリアンでは、マクロビウスによる *Somnium Scipionis* の註解の写本 MS Canon. Class. Lat. 257 や、チョーサーのドリーム・ヴィジョン作品が多く含まれている MS Fairfax 16 などである。パリにも向かい、フランス国立図書館ではボエティウスの写本 Latin 6405 などを閲覧した。また、写本の書体を解読するための Palaeography の技術を、セント・ヒルダズ・カレッジの Daniel Sawyer 博士から授業を通じて教えていただいた。

7　研究結果・成果

上記 6②における活動内容について、それぞれ得られた結果を報告する。

1. 「感情史」の視点からの分析においては、the *Isle of Ladies* の作者（以下 *Isle* 詩人と表現する）、ひいてはドリーム・ヴィジョンにおける感情表現が、いかに“affective piety”の伝統と共通点を持つかを論じることができた。*Isle* 詩人が夢の内容に強いリアリティを感じる原因として、夢で実際に起きる出来事に対して感情的な反応を繰り返すことが挙げられる。*Isle* 詩人は、夢の中で見る「騎士」と「島の女王」との宮廷風恋愛を見守るいっぽうで、自分にとっての婦人との恋愛を、みずから夢の中で体験する。体験的な夢のあり方は、詩人に強い喜びや悲しみを抱かせ、彼と夢の結びつきは通常のドリーム・ヴィジョンよりも大きなものになる。自分のモデルになるような出来事を夢の中で見ながら、自分も同様の恋愛を、しかも感情を伴った上で演じるというのは、まるで読者が物語の中に実際に入り込むような感覚に似ている。感情の歴史にまつわる研究を参照すると、以上のような感情の効果は別のジャンル、特に“affective piety”のテクストに見られ、有意義な比較ができることがわかった。Sarah McNamer の研究は、強い宗教的な感情をもたらすための装置として、宗教テクストが読者にパフォーマンス（例えば心の中で、キリストの受難の苦しみをしっかりと見つめるなど）を促すことを指摘する。さらに Fiona Somerset は、

〔７　研究結果・成果（つづき）〕

ロラードたちのテクストの中にも、描かれている殉教者に強い共感を覚えさせ、読者に宗教的な自己形成の機会を与えるものがあると論じている。これらの“affective piety”の研究から見えてくる感情とテクストの関係は、*Isle of Ladies*にも通じる論理である。詩人は、体験的な関わりを通じて、夢の内容に感情的な執着を持つ。ドリーム・ヴィジョンは一人称の幻視的な物語である以上、詩人の感情が夢の内容に真実性を与える要素になり得ることが示唆される。

もう一点、*Isle*という作品が持つ感情の側面として興味深いのは、夢と「真実/誠実」(Middle English“troth”)との関係である。*Isle*の夢には、夢が虚構に過ぎないことをあらわす仕掛けが多く登場する。例えば舞台となる女性たちの島を構成しているのは、ガラスで作られた城門や造りものの鳥たちである。しかし、作品を通じて詩人が強調するのは、夢の虚構的な性質にも関わらず、自分は確かに喜びや悲しみ等を感じたという（心の中の）事実だ。Richard Greenの有名な研究*A Crisis of Truth*によると、14世紀末のイングランドにおいては、“troth”が「心の中の真実」という意味から、「客観的な事実」を意味するよう、変化が起きた。*Isle*には詩人の誠実を表すための“troth”という単語が多く登場し、それは夢から覚めた後でも強調される特質である。Greenの文脈とあわせると、“troth”が客観的事実を表し始めた時代に、虚構の真実性を自分の心（感情）に求めたという現象は非常に興味深いと言える。

原稿を読んでいただいたCarolyn Larrington教授からは、作中に表現される感情の正確な描写(例えばsympathyなのか、empathyなのか)について改善のためのアドバイスを受けた。

2.「抒情詩の伝統」の調査

本項は主に「今後の発展や展望」について説明することとなる。『薔薇物語』などの代表的なドリーム・ヴィジョン作品は、12世紀に発達したトゥルバドールたちによる抒情詩の表現を引き継いで成立しているが、この伝統の中でチョーサーなどの英文学作品はどのように評価したらよいか、評価のための土台を考えることができた。抒情詩とドリーム・ヴィジョンの関係で特に興味深いのは、『薔薇物語』における概念の流動性（とある寓意が具体的な人物として描かれることもあれば、単なる心象として描かれることもある）が、トゥルバドールの詩にもすでに見られるということだ。例えば、Sarah Kayの*Subjectivity in Troubadour Poetry*、L.T. Topsfieldの“The Roman de la Rose of Guillaume de Lorris and the Love Lyric of the Early Troubadours”などの研究は、トゥルバドールの内面描写が、具象と抽象の境界を往復するような特徴があることを論じている。こうした特徴は、「研究目的」の問題提起であった哲学と抒情詩の結びつきを説明できる可能性がある。大陸の文学的伝統についての調査をもとに、今後は中世英文学に再び焦点を当て、抒情詩的要素と哲学的視点の融合という観点から研究を続ける予定である。具体的には、14世紀と15世

紀の中英語抒情詩（宮廷風恋愛の話題中心）、そしてドリーム・ヴィジョン（チョーサー、ラングランド、ガウェイン詩人、リドゲイトなど）を分析する。

Marion Turner 教授には、15 世紀研究が現在では将来性があるというアドバイスとともに、なぜ 14・15 世紀にドリーム・ヴィジョンがイングランドとスコットランドで非常に流行したのか、考えてみる価値があることを教えていただいた。

3. 写本の調査

写本に描かれたイラストレーションは、当時の人々が作品をどのように映像として思い浮かべていたのかを知るための貴重な資料である。例えばボドリアン所蔵の MS Canon. Class. Lat. 257 には、夢の中で大スキピオと宇宙（天の川）を旅するスキピオの様子が描かれている(f. 1^{v})。マクロビウスのこの作品は、ドリーム・ヴィジョンが伝統として確立するための要因となったシャルトル学派に大きな影響を与えたが、その際シャルトルの哲学者たちが重視したのが宇宙の原理や成り立ちである。この写本のイラストレーションは中世における「夢」が宇宙の哲学的理解と切り離せない概念であることを示唆していることが確認できた。フランス国立図書館で閲覧した Latin 6405 は、作者であるボエティウスがベッドで寝ているイラストレーションから本が始まる。完全なドリーム・ヴィジョンではないこの作品も、中世後期の人々にとっては夢の作品として位置付けられていた可能性がある。

以　上